

MM023『假名古事記』上中下三冊。明治七年一月發行、東京中西忠誠／甲斐内藤傳右衛門
坂田鐵安撰 [不許翻刻]『假名古事記』三卷 官許 中西忠誠 藏 内藤傳右衛門 版

ふることぶみしもつまき
古事記下巻

十六 仁徳天皇

おほささきのみこと なには たかつ みや まし／＼ あめのした すめらみこと かづらき そ つ び こ むすめ
大 萑 命。難波の高津の宮に坐て。天下しろしめしき。この天皇。葛城の曾都毘古の女。
いハのひめのみこと オホキサキ みあひ うみ み こ おほえ いざほわけのみこと なかつみこ
石之日賣命大 后に娶まして。生ませる御子。大江の伊邪本和氣命。つぎに墨江の中津王。
たぢひ みづはわけのみこと をあさづまのわくごのすくねのみこと かみ ひむか むらがた きみうしもろ
つぎに虬の水齒別命。つぎに男淺津間若子宿禰命四柱また上にいへる日向の諸縣の君牛諸
むすめ かみながひめ うみ こ はたばのおほいらつこ みな おほくさかのみこ
が女。髪長比賣をめして。生ませる御子。波多毘能大郎子。またの名ハ大日下王。つぎ
はたばのわきいらつめ みな ながひひめのみこと みな わかくさかべのみこと ままいもやたのわきいらつめ
に波多毘能若郎女。またの名ハ長日比賣命。またの名ハ若日下部命二柱また庶妹八田若郎女
みあひ ままいも うちの わきいらつめ みあひ ふたはしら みこまさざりき
に娶まし。また庶妹宇遲能若郎女に娶ましき。この二柱ハ。無御子也。すべてこの
おほささきのすめらみこと み こたち むはしら いざほわけのみこと あめのした
大 萑 天皇の御子等。あハせて六王ましき 男王五 柱女王一 柱。かれ伊邪本和氣命ハ。天下し
たぢひ みづはわけのみこと あめのした をあさづまのわくごのすくねのみこと あめのした
ろしめし。つぎに虬の水齒別命も。天下しろしめし。つぎに男淺津間若子宿禰命も天下しろし
すめらみこと み よ おほさきいハのひめのみこと みなしろ かづらきべ さだめ
めしき。この天皇の御世に。大后石之日賣命の御名代として。葛城部を定たまひ。また
ひつぎのいざほわけのみこと みなしろ さだめ さだめ みづはわけのみこと みなしろ
太 子伊邪本和氣命の御名代として。壬生部を定たまひ。また水齒別命の御名代として。
たぢひ べ さだめ おほくさかのみこ みなしろ おほくさかべ さだめ わかくさかべのみこと
虬部を定たまひ。また大日下王の御名代として。大日下部を定たまひ。若日下部命の
みなしろ わかくさかべ さだめ はたばと えだて まむた つつみ まむた みやけ
御名代として。若日下部を定たまひき。また秦人を役て。茨田の堤。茨田の三宅をつく
わに いげよさみ いげ なには ほりえ うみ とほし
りたまひ。また丸邇の池依綱の池をつくりたまひ。また難波の堀江をほりて。海に通し。また
をばし え すみのえ つ さだめ すめらみこと たかやま よも くに
た小橋の江をほり。また墨江の津を定たまひき。ここに天皇。高山にのぼりまして。四方の國
み のり くぬち けぶりたす くに まづし かれ みとせ いふ
を見したまひて。詔たまひつらく。國中に烟發ず。國みな貧窮。故いまより三年と至ま
おほみたちから みつぎえだち のり
でハ。こと／＼に人 民の課 役をゆるせと詔たまひき。ここをもて大殿破こぼれて。
あめ つくろひ ひ もるあめ うげ とこ ところ うつりさけ
こと／＼に雨もれども。かつて修理たまはず。械もちてその漏雨を受て。もらざる處に遷避
くぬち み くに けぶりみち かれおほみたちとみ いま
ましき。のちに國中を見しやまへバ。國に烟滿たりき。故人 民富とおもほして。今はと
みつぎえだち おほみたちから えだち かれ みよ たたへ
課 役おほせたまひき。ここをもて百 姓さかえて。役にくるしまざりき。故その御世を稱
ひじりのみよ おほさきいハのひめのみこと うはなりなみ すめらみこと つかはすみめ
て。聖石世とまをす。その大后石之日賣命。はなはだ嫉 妬したまひき。かれ天皇の所使妾
みや うち え ことだて あし ねたみ すめらみこと
たちハ。宮の中をも得のぞかず。言立バ。足もあがかに嫉妬たまひき。ここに天皇。
きびのあまのあたへ むすめ なくろひめ か ほ きこ ぬさげ つかひ
吉備海部直が女。名ハ黒日賣。それ容姿よしと聞しめして。喚上て使たまひき。しかれどもその
おほさき ねたます かしこみ もとづくに すめらみことたかどの まし ころひめ ふなで
大后の嫉 を畏て。本國ににげくだりき。天皇高臺に坐て。その黒日賣が船出するをみさけま
うた
して。歌ひたまはく。おきへにハ。をぶねつらく。くろざきの。まさづこわざも。くにへくだらす。故
おほさき みうた いたく おほうら ひと おひ かち やらひ
大后。この御歌をさかして。大いかりまして。大浦に人をつかはして。追おろして。歩より追去たま
すめらみこと ころひめ こひ おほさき あはぢしま み のり
ひき。ここに天皇。その黒日賣を戀たまひて。大后をあざむかして。淡道嶋見たまはむと詔たま
いでませ あはぢしま はろ／＼ みさけ うた
ひて。幸行るときに。淡道嶋にて。遙 に望まして歌ひたまはく。おしてるや。なにはのさきよ。い
すなはち
でたちて。わがくにみれば。あはしま。おのごろしま。あじまさの。しまもみゆ。さけつしまみゆ。乃
しま きびのくに いでまし ころひめ くに やまがた ところ おほまし
その嶋よりつたひて。吉備國に幸行き。かれ黒日賣。その國の山方の地に大坐まさしめて
おほみけ おほみあつもの にむ そ こ あをな つめ すめらみこと をとめ なつむ
大御飯たてまつりき。ここに大御羹を煮として。其地の菘菜を採るときに。天皇その嬢子の菘採
ところ うた
處にいたりまして。歌ひたまはく。やまがたに。まけるあをなも。きびひとと。ともにしつめバ。たぬ
すめらみことのほ いで ころひめ うた
しくもあるか。天皇上り幸ますときに。黒日賣のたてまつれる歌。やまとへに。にしふきあげて。く
ま た
もばなれ。そきをりとも。われわすれめや。又歌曰。やまとへに。ゆくはたがつま。こもりづの。した

よハへつつ。ゆくはたがつま。此よりのち。大后。豊樂したまはむとして。御綱柏を採に。木國に
いでませ あひだ すめらみこと やたのわきいらつめ みあひ おほきさき みつながしは みふね つみみて かへり
 幸行る間に。天 皇。八田若郎女に婚ましつ。ここに大后ハ。御綱柏を御船に積盈て。還ますと
もひとり つかさ つかは きびのくに こしま よほろ おの くに まかる なには おほわた
 きに。水取の司に使ゆる。吉備國の兒嶋の仕丁。これ己が國に退に。難波の大渡に。おく
くらびとめ ふね すなはちかたり すめらみこと やたのわきいらつめ みあひ よるひる
 れたる倉人女の船あへり。乃 語けらくハ。天 皇ハ。このごろ八田若郎女に婚まして。夜晝
たはれ おほきさき いでます かれ
 戲ますを。もし大后ハ。このこときこしめさねかも。しづかにあそび幸行とぞかたりける。故その
くらびとめ きき すなはちみふね おひしき よほろ つがき
 倉人女。このかたれることを聞て。即 御船に追近て。仕丁が言つるごとありさま具にま
ここにおほきさき いたく そのみふね みつながしは うみ なげ
 をしき。於是大后。大うらみいかりまして。其御船にのせたる御綱柏をバことごとに海に投うてた
そこ みつ さき すなはちみや いり みふね まき かりえ
 まひき。かれ其地を。御津の前とハいふなり。即 宮に入まさずて。その御船をひき避て。堀江
かハ やましろ のぼりいで このとき うた
 にさかのぼらして。河のまに／＼。山代に上幸ましき。此時に歌ひたまはく。つぎねふ
やましろがはを かのぼり わがのぼれバ かのべに おひだてる さしぶを
 や。やましろがはを。かのぼり。わがのぼれバ。かのべに。おひだてる。さしぶを。
さしぶのき しがしたに おひだてる はびろ ゆつまつばき しがはなの てりいまし
 さしぶのき。しがしたに。おひだてる。はびろ。ゆつまつばき。しがはなの。てりいまし。
すなはちやましろ なら やま ぐち
 しがはの。ひろりいますハ。おほきみろかも。即 山代よりめぐりて。那良の山の口にい
うた
 たりまして。歌ひたまはく。つぎねふや。やましろがはを。みやのぼり。わがのぼれバ。
あをによし ならをすぎ をだて やまとをすぎ わがみがほし くにハ かづらき た
 あをによし。ならをすぎ。をだて。やまとをすぎ。わがみがほし。くにハ。かづらき。た
かみや わぎへのあたり かくうた かへ ししつつき からひと な むりのみ いへ
 かみや。わぎへのあたり。如此歌ひて還らして。暫筒木の韓人。名ハ奴理能美が家にい
すめらみこと おほきさきやましろ のぼりいで きこ とねり な とりやま
 りましき。天 皇。大后山代より上幸ましぬと聞しめして。舍人名ハ鳥山といふ人をつか
みうた
 はしけるときに。送たまへる御歌曰。やましろに。いしけとりやま。いしけいしけ。あが
つぎ わに おみくちこ つか うた
 はしづまに。いしきあはむかも。又續て丸邇の臣口子を遣はして。歌ひたまはく。みもろ
の そのたかきなる おほるこがはら おほるこが はらにある きもむかふ ころを
 の。そのたかきなる。おほるこがはら。おほるこが。はらにある。きもむかふ。ころを
だにか あひおもはずあらむ 又歌曰 つぎねふ やましろめの こくはもち うちしおほね ね
 だにか。あひおもはずあらむ。又歌曰。つぎねふ。やましろめの。こくはもち。うちしおほね。ね
じろの しろただむき まかずけばこそ しらずともいはめ かれこの口子の臣 この御歌をまを
 じろの。しろただむき。まかずけばこそ。しらずともいはめ。かれこの口子の臣。この御歌をまを
すをりしも 雨大ふりき ここにその雨をも避ず 前殿戸に參ふせば 違て後戸にい
 すをりしも。雨大ふりき。ここにその雨をも避ず。前殿戸に參ふせば。違て後戸にい
たまひ 後殿戸に參ふせば 違て前戸にいでたまふ かれ匍匐進赴て 庭中に 跪
 たまひ。後殿戸に參ふせば。違て前戸にいでたまふ。かれ匍匐進赴て。庭中に 跪
ときはに 潦水紅紐にふれて 青みな紅になりぬ ここに口子の臣の妹 口日賣 大后に仕へ奉
 ときはに。潦水紅紐にふれて。青みな紅になりぬ。ここに口子の臣の妹。口日賣。大后に仕へ奉
れり 故この口日賣歌ひけらく やましろの つつきのみやに ものまをす あがせのきみ
 れり。故この口日賣歌ひけらく。やましろの。つつきのみやに。ものまをす。あがせのきみ
ハ なみたぐましも 爾に大后そのゆゑを問たまふときに 僕兄口子の臣なりとまをしき
 ハ。なみたぐましも。爾に大后そのゆゑを問たまふときに。僕兄口子の臣なりとまをしき。
ここに口子の臣 またその妹口日賣 また奴理能美 三人して議て 天 皇にまをさしめけ
 ここに口子の臣。またその妹口日賣。また奴理能美。三人して議て。天 皇にまをさしめけ
らくハ 大后の幸行ゆゑハ 奴理能美が養所虫 一度ハ匍虫になり 一度ハ殻になり 一度
 らくハ。大后の幸行ゆゑハ。奴理能美が養所虫。一度ハ匍虫になり。一度ハ殻になり。一度
ハ飛鳥になりて 三色に變る 奇き虫あり この虫をみそなはしに いらませるこそあれ 更
 ハ飛鳥になりて。三色に變る。奇き虫あり。この虫をみそなはしに。いらませるこそあれ。更
に異みころハマさず 如此まをすときに 天 皇。しからバ 吾も 奇異とおもへバ 見に行
 に異みころハマさず。如此まをすときに。天 皇。しからバ。吾も。奇異とおもへバ。見に行
なと詔たまひて 宮より上り幸行て 奴理能美が家に入坐るときに その奴理能美 己が
 なと詔たまひて。宮より上り幸行て。奴理能美が家に入坐るときに。その奴理能美。己が
養所三種の虫を 大后にたてまつりき 爾天 皇。その大后の坐る殿戸に御立して 歌 曰
 養所三種の虫を。大后にたてまつりき。爾天 皇。その大后の坐る殿戸に御立して。歌 曰。
つぎねふ やましろめの こくはもち うちしおほね さわさわに ながいへせこそ うちわたす や
 つぎねふ。やましろめの。こくはもち。うちしおほね。さわさわに。ながいへせこそ。うちわたす。や
がはえなす きいりまゐくれ 此天 皇と大后と歌所たる六歌ハ しつ歌の返うたなり 天 皇
 がはえなす。きいりまゐくれ。此天 皇と大后と歌所たる六歌ハ。しつ歌の返うたなり。天 皇。
八田若郎女を戀たまひて 御歌をおくりたまへる その歌 やたの ひともとすげハ こもたず た
 八田若郎女を戀たまひて。御歌をおくりたまへる。その歌。やたの。ひともとすげハ。こもたず。た
ちかあれなむ あたらすがはら ことをこそ すげはらといはめ あたらすがしめ 爾八田若郎女の
 ちかあれなむ。あたらすがはら。ことをこそ。すげはらといはめ。あたらすがしめ。爾八田若郎女の
答の歌 やたの ひともとすげハ ひとりをりとも おほきみし よしときこさバ ひとりをりとも 故
 答の歌。やたの。ひともとすげハ。ひとりをりとも。おほきみし。よしときこさバ。ひとりをりとも。故
八田若郎女の御名代として 八田部を定たまひき また天 皇。その弟速總別王を 媒として
 八田若郎女の御名代として。八田部を定たまひき。また天 皇。その弟速總別王を。媒として。
ままいもめどりのみこ こひ めどりのみこ はやぶさわけのみこ かり おほきさき たずき
 ままいもめどりのみこ。こひ。めどりのみこ。はやぶさわけのみこ。かり。おほきさき。たずき。
庶妹女鳥王を乞たまひき ここに女鳥王 速總別王に語たまはく 大后の強によりて
 庶妹女鳥王を乞たまひき。ここに女鳥王。速總別王に語たまはく。大后の強によりて。
八田若郎女をも治たまはず 故不仕奉 吾ハ汝命の妻に爲なむと思ひて すなはち婚まし
 八田若郎女をも治たまはず。故不仕奉。吾ハ汝命の妻に爲なむと思ひて。すなはち婚まし

き。是をもて速總別王。復こと奏たまはざりき。ここに天皇。直に女鳥王の坐ところに幸て。その殿戸の闕の上に坐き。ここに女鳥王。機に坐て。服織せり。かれ天皇歌よみしたまはく。めどりの。わがおほきみの。おろすはた。たがかねろかも。女鳥王答の歌。たかゆくや。はやぶさわけの。みおすひがね。故天皇。そのころを知して。宮に還ましき。この時。その夫速總別王の來ませるときに。その妻女鳥王歌たまはく。ひばりハ。あめにかける。たかゆくや。はやぶさわけ。さぎきとらさね。天皇この歌をきかして、即軍をおこして。殺たまはむとす。かれ速總別王女鳥王。共に逃さりて。倉崎山にのぼりましき。ここに速總別王歌ひたまはく。はしたての。くらはしやまを。さかしみと。いはかきかねて。わがてらすとも。又歌曰。はしたての。くらはしやまハ。さがしけど。いもとのぼれバ。さがしくもあらず。故其地より逃て。宇陀の蘇邇にいたりませるときに。御軍追いたりて。殺まつりき。その軍の將山部大楯連。その女鳥王の。御手に纏せる玉釧をとりて。己が妻にあたへたりき。この後豊樂したまはむとするとき。氏氏の女ども。みな朝參す。ここに大楯連が妻。其王の玉釧を。己が手に纏て參れり。ここに大后石之日賣命。自ら大御酒のかしはを取して。諸氏氏の女どもに賜ひき。爾大后。その玉釧を見知たまひて。御酒のかしはを賜はずて。乃引退たまひて。その夫大楯連を召出で。詔たまはく。其王等无禮によりて。退たまへる。是ハ異なる事なくこそ。夫の奴や。己が君の御手にまかせる玉釧を。膚も燻きに剥持來て。己が妻に與たることと詔たまひて。乃死刑におこなひ給ひき。亦あるとき。天皇。豊樂したまはむとして。日女嶋に幸行るときに其嶋に雁卵生たりき。爾建内宿禰命を召て。歌もて。雁の卵生る状を問したまへる。その歌曰。たまきはる。うちのあそ。なこそハ。よのながひと。そらみつ。やまとのくにに。かりこむと。きくや。於是建内宿禰。歌もて語まをさく。たかひかる。ひのみこ。うべしこそ。とひたまへ。まこそに。とひたまへ。あれこそハ。よのながひと。そらみつ。やまとのくににかりこむと。いまだきかず。如此まをして。御琴を給はりて。歌曰。ながみこや。つひにしらむと。かりはこむらし。此ハ本岐歌の片歌なり。この御世に。免寸河の西のかたに。一高樹ありけり。其樹の影。旦日にあたらバ。淡道嶋に速。夕日にあたらバ。高安山を越き。かれ是樹をきりて。船に作れるに。甚捷行船にぞありける。時にその船の號を。枯野とぞ謂ける。故この船をもて。旦夕に淡道嶋の寒泉を酌て。大御水たてまつりき。この船の破たるもて。鹽を焼き。その焼遺る木を取て。琴に作たりしに。その音七里に響たりき。爾歌に。からぬを。しほにやき。しがあまり。ことにつくり。かきひくや。ゆらのとの。となかの。いくりに。ふれたつ。なづのきの。さやさや。此ハ志都歌の返歌なり。此天皇。御年八十三。御陵ハ毛受の耳原にあり。

十七 履中天皇

伊邪本和氣命。伊波禮の若櫻の宮に坐て。天下治めしき。この天皇。葛城の曾都毘古の子。葦田宿禰の女。名ハ黒比賣命に娶まして。生ませる御子市邊之忍齒王。つぎに御馬王。つぎに妹青海郎女。亦の名ハ飯豊郎女。本難波宮に坐しとき。大嘗に坐て。豊明せず時に。大御酒にうらげて。大御寝ましき。爾にその弟墨江中王。天皇を取まつらむとして。大殿に火を著たりき。ここに倭の漢直の祖。阿知直。盜出で。御馬に乗まつりて。倭に幸まさしめき。故多遲比野にいたりまして。寤まして。此間ハ何處ぞと詔たまひき。爾阿知直まをさく。墨江中王。大殿に火を著たまへり。故率まつりて倭に逃ゆくなりとまをしき。ここに天皇歌曰。たちひぬに。ねむとしりせば。たつごもも。もちて。こましものねむとしりせば。波邇賦坂にいたりまして。難波宮を見望たまへバ。其火猶炳くみえたり。爾また天皇歌曰。はにふざか。わがたちみれば。かぎろひの。もゆるいへむら。つまがいへのあたり。故大坂の山の口にいたりませるときに。女人あへり。その女人のまをさく。兵を持る人等。多この山を塞をり。當岐麻道より。めぐりて

こえいで 越幸ますべしとまをしき。爾天皇歌 曰。おほさかに、あふやをとめを。みちとへバ。ただにはの
かれのぼ いでまし いそのかみのかみのみや ましへ いろ ど みづはわけのみこと まほ き
らず。たぎまちをのる。故上り幸て。石上神宮に坐き。ここにその伊呂水齒別命。參赴
まして。謁しめたまふ。爾天皇詔しめたまはく。吾汝命を。若墨江中王と。同心ならむか
あひいはじ のら あ きたなき すみのえなかつみこ おやじこころ
とおもほせば。不相言と詔しめたまへバ。僕ハ穢邪ところなし。墨江中王と同心にもあらず
こたへ またのら いまかへ くだ すみのえなかつみこ こらし のぼ き
と答をしたまひき。亦詔しめたまはく。しからバ。今還り下りて。墨江中王を殺て。上り來ま
そのとき あれ あひいは のら かれすなほち なに は すみのえなかつみこ ちか
せ。其時にこそ吾かならず相言めと詔しめたまひき。故即 難波にくだりまして。墨江中王に近く
つかへ はやびと な そば かり あざむき もしいましがいふ あれすめら な いまし おほおみ
習まつる隼人。名ハ曾婆加理を欺て。若汝吾云ことをきかバ。吾天皇と爲り。汝を大臣
あめのしたらし のり そば かり みこと まにま くれ はやびと
になして。天下治さむとす。いかにと詔たまひき。曾婆訶理。命の隨とまをしき。爾その隼人
ものさへ たまひ いまし きみ とり のり そば かり おの きみや
に祿多に給て。しからバ汝の王を殺まつれと曰たまひき。ここに曾婆加理。己が玉の廁
いり ほこ しし せ くれ そば かり あて やまと のぼ いで
に入ませるをうかがひて。矛もちて刺て殺まつりき。故曾婆訶理を率。倭に上り幸ますと
おほさか やま くち おもほさく そば かり わが おほきいさ おの
きに。大坂の山の口にいたりまして。以爲ハ。曾婆加理。吾ために大 功あれども。すでに己
きみ しせ きたなき いさを いつはり
が君を殺まつれるハ。不義しわざなり。しかれどもその功をむくいずハ。無信せしになりぬ
すで おこな かへり そのころ かしこ くれ いさを むくゆ そのむさね
べし。既にちぎりしごと行はバ。還て其情こそ惶けれ。故その功ハ報とも。其正身
ほろほ そば かり のり こ
をバ。滅してむとぞおもほしける。ここをもて曾婆訶理に詔たまはく。今日ハ此間にとどまり
まづおほおみ くらみ あす のぼり のり そのやま くち すなはちかりみや
りて。先大臣の位をたまひて。明日上幸まさむと詔たまひて。其山の口にとどまりまして。即 假宮
にはか とよのあかり すなはち はやびと おほおみ くらみ たま つかさづかさ おろがま
をつくりて。忽に豊 樂せして。乃 その隼人に。大臣の位を賜ひて。百 宦をして 押しめ
はやびと けふ おほおみ
たまふに。隼人よろこびて。こころざし遂ぬとぞおもひける。ここに其隼人に。今日大臣
おやじつき さげ のみ のり とも のま おも かくすおほまり その みき もり
と。同 盞の酒を飲てむとすと詔たまひて。共に飲すときに。面を隠大鏡に。其すすむる酒を盛た
み こまづのみ はやびと のむ くれ はやびとのむ おほひ
り。ここに王子先飲たまひて。隼人のちに飲。故その隼人飲ときに。大鏡面を覆たりき。か
むしろ した おか たち とりいで はやびと くび きり かく くる ひ のぼりてまし くれそ こ
れ席の下に置せる劔を取出て。その隼人が頸を斬たまひき。乃して明日ぞ上 幸ける。故其地
ちか あすか やまと のり けふ こ ころ はらひ
を近づ飛鳥となづく。倭にのぼりいたりまして。詔たまはく。今日ハ此間にとどまりて。祓禊
あす まるで かみ みや をろがま くれそ こ とほつあすか くれ
して。明日參出て。神の宮を 押むとすと詔たまひき。故其地を遠飛鳥となづけき。故
いそのかみのかみのみや まるで すめらみこと まつりごと ことむけをへ まる さむらふ まさき くれめしいれ
石上神宮に參出て。天皇に。政 すでに平 訖て。參のぼりて侍と奏しめたまひき。故召入
かたら すめらみこと あちのあたへ はじめ くらつかさ めし たどころ たまひ また
て。語ひたまひき。天皇ここに阿知直を。始て藏 官に任たまひ。また糧地をも給き。亦この
みよ わかさくらべ おみら わかさくらべ な たまひ ひめだのきみら ひめだ きみ かばね たまひ
御世に。若櫻部の臣等に。若櫻部といふ名を賜また比賣陀君等に。比賣陀の君といふ姓を賜
いはれべ さだめ すめらみこと みとし むそちまりよつ みはか もす
き。また伊波禮部を定たまひき。この天皇の御年。六十四。御陵ハ毛受にあり。

十八 反正天皇

みづはわけのみこと たち ひ しぼかき みや ましへ あめのしたらし すめらみこと み み たけこのさかりふ たきいつきだ
水齒別命。多治比の柴垣の宮に坐て。天下治めしき。この天皇。御身の長九 尺二寸半。
み はながさ ひとき ひろさふたきだ かみしもひし たま ぬけ すめらみこと
御齒長一寸廣二分。上下等くととのひて。すでに珠を貫るがごとくなりき。この天皇。
わにのこごとのおみ むすめ つぬのいらつめ うみ み こ かひのいらつめ つぶらのいらつめ
丸邇の許暮登臣の女。都怒郎女をめて。生ませる御子。甲斐郎女。つぎに都夫良郎女柱ま
おやじおみ むすめ おとひめ うみ み こ たからのみこ たかべのいらつめ よはしら
同臣の女。弟比賣をめて。生ませる御子。財 王。つぎに多訶辨郎女。あはせて四王ましき。
すめらみこと みとしむそち みはか もすめ
天皇。御年六十。御陵ハ毛受野にあり。

十九 允恭天皇

をあさづまのわくごのすくねみこと とほつあすかのみや ましへ あめのしたらし すめらみこと おほほどのみこ いも おさか
男淺津間若子宿禰命。遠飛鳥宮に坐て。天下治めしき。この天皇。意富本杼王の妹。忍坂
おほなかつひめのみこと みあひ うみ こ きなしのかるのみこ ながたのおほいらつめ
の大津比賣命に娶まして。生ませる御子。木梨之輕王。つぎに長田大郎女。つぎに
さかひのくろひこのみこと あなほのみこと かるのおほいらつめ たみ な そとほしのいらつめ ミナヲトホシノミトオハセルユエハノ ヒカリヨリ
境之黒日子王。つぎに穴穂命。つぎに輕大郎女。亦の名ハ衣通郎女御名所以負衣通王者之光 自
トホリイデツレバナリ やつりのしろひこのみこ おほほつせのみこと たちばなのおほいらつめ さかみのいらつめ 九
衣通出也つぎに八瓜之白日子王。つぎに大長谷命。つぎに橘大郎女。つぎに酒見郎女柱す
すめらみこと み こたち このはしらましき ヒコミコイツハシラヒメミコ このはしら なか あなほのみこと あめのしたらし
て天皇の御子等。九 柱男王 五 女王この九 柱の中に。穴穂命ハ。天下治めしき。つぎに
おほほつせのみこと あめのしたらし すめらみこと あまつひつぎしらし とき いなびまし あ
大長谷命も。天下治めしき。天皇。はじめ天津日繼治めさむとせし時に。天皇辭詔て。我ハ
うちはへ やまひ ひつぎえ のり おほきさき まへつぎみたち かたくまし
一長たる病しあれば。日繼得しらすじと詔たまひき。しかれども大后をはじめて。諸卿等。堅奏た

まへるによりてぞ。天下治めしける。此時新良國主。御調もの八十一艘貢進き。ここに御調
 の大使。名ハ金波鎮漢紀武とぞいひける。この人薬の方を深く知りき。故皇帝が御方を治
 まつりき。ここに天皇。天下の氏氏名名の人等の。氏姓の忤過ることを愁まして。味白構
 の言八十禍津日前に。玖訶盆を居て。天下の八十友緒の氏姓を定たまひき。また
 木梨輕太子の御名代として。輕部を定たまひ。大后の御名代として。刑部を定たまひ。大后
 の弟田井中比賣の御名代として。河部を定たまひき。天皇。御年七十八。御陵ハ河内の惠賀
 の長枝にあり。天皇崩まして後。木梨の輕太子。日繼治めず定まれるを。いまだ即位
 たまはざりし間に。その伊呂妹輕大郎女に^姦て。歌よみし曰。あしひきの。やまだをつくり。やま
 だかみ。したびをわしせ。したどひに。わがとふいもを。したなきに。わがなくなつまを。こふこそハ。
 やすくはだふれ。此ハ志良宜歌なり。又歌曰。ささばに。うつやあられの。たしだしに。みねてむの
 ちハ。ひとハかゆとも。うるはしと。さねしきねてバ。かりこもの。みだればみだれ。さねしきねてバ。
 此ハ夷振の上歌なり。ここをもて百官をはじめて。天下の人等。輕太子にそむきて。穴穗御子
 に歸ぬ。爾輕太子畏て。大前小前の宿禰の大臣の家に逃りて。兵器を備作たまひき
 ソトキニツクセルヤハソノサキアガガネニシタリカレソノヤカルヤトイフ
 爾時所作矢者銅其箭之内故号其矢謂輕箭也。穴穗御子も兵器を作たまふ此王子所作之矢者即今時之
 ヤナリソノアガガネノヤトイフ
 矢者也是謂穴穗箭也。ここに穴穗御子軍をおこして。大前小前の宿禰の家を圍たまふ。爾その門
 にいたりませるときに。大氷雨ふりき。故歌曰。おほまへ。をまへすくねが。かなとか
 げ。かくよりこね。あめたちやめむ。爾にその大前小前の宿禰。手を舉膝を打。舞訶那傳
 うたひ參來。その歌曰。みやひとの。あゆひのこすず。おちにきと。みやひととよむ。さとびともゆ
 め。此歌ハ。宮人振なり。如此歌つつ參歸て。まをしけらく。我天皇の御子。伊呂兄の王を及兵
 たまふな。若せめたまはバ。かならず人咲む。僕捕て貢進とまをしき。かれ兵を解て退さき。故
 大前小前の宿禰。その輕太子を捕て。率參出て貢進き。その太子。捕られて歌曰。あま
 だむ。かるのをとめ。いたなかバ。ひとしりぬべし。はさのやまの。はとの。したなきん
 になく。又歌曰。あまだむ。かるをとめ。したたにも。よりねてとほれ。かるをとめども。故その
 輕太子をバ。伊余の湯に流まつりき。亦將流たまはむとせし時に。歌曰。あまとぶ。とりも
 つかひぞ。たづがねの。きこえむときハ。わがなとはさね。此三歌ハ。天田振なり。又歌曰。
 おほきみを。しまにはぶらバ。ふなあまり。いがへりこむぞ。わがたたみゆめ。ことをこそ。たたみと
 いはめ。わがつまハゆめ。此歌ハ。夷振の片下なり。その衣通王。歌をたてまつる。其歌曰。なつ
 くさの。あひねのはまの。かきがひに。あしふますな。あかしてとほれ。故後に亦戀慕不堪て。追
 往時に。歌曰。きみがゆき。けながくなりぬ。やまたづの。むかへをゆかむ。まつにハ
 またじ此云山多豆者是今造木者也。故追到ませる時に。待懷て。歌曰。こもりくの。はつせの
 やまの。おほをにハ。はたはりだて。さををにハ。はたはりだて。おほをにし。なかさだ
 める。おもひづまあはれ。つくゆみの。こやるこやりも。あづさゆみ。たてりたてりも。
 のちもとりみる。おもひづまあはれ。又歌曰。こもりくの。はつせのかはの。かみつせに。いく
 ひをうち。しもつせに。まくひをうち。いくひには。かがみをかけ。まくひには。またまをかけ。またま
 なす。あがもふいも。かがみなす。あがもふつま。ありと。いはバこそに。いへにもゆかめ。くにをも
 しぬばめ。如此歌ひて。即共に自死たまひき。故この二歌ハ。讀歌なり。

二十 安康天皇

あなほのみこ いそのかみ のあなほのみや ましへ あめのしたしろし すめらみこと いるとおほはつせのみこ
 穴穗御子。石上之穴穗宮に坐て。天下治めしき。天皇。伊呂弟大長谷王子のために。
 さかもとののみら おやねのおみ おほくさのみこ みもと つかは のら
 坂本臣等が祖根臣を。大日下王の許に遣して。詔しめたまへらくハ。汝命の妹若日下王を。
 おほはつせのみこ あはせ かれたてまつる のら ここ おほくさのみこ よたびをがみ まをし もし
 大長谷王子に婚むとす。故貢べしと詔しめたまひき。爾に大日下王。四揮て白たまはく。若

か か おほみこと あら と いた おき これかしこし おほみこと たてまつらむ
如此る大命も有むかとおもへるゆゑに。外にも出さずて置つ。是恐。大命のまにまに奉進とま
をしたまひき。しかれども言以まをす事ハ。無禮とおもほして。即其妹の禮物として。押木の玉纏
を持しめて。たてまつりき。根臣ハ。即その禮物の玉纏を盗とりて。大日下王を讒まつり曰。
おほくさかのみこ おほみこと うけ おほみこと ひとしうがら したむしろ たち たかみどり
大日下王ハ。勅命を受たまはらずて。己が妹や。等族の下席にならむといひて。横刀の手上取
しばりて怒ましつとまをしき。故天 皇大いかりまして。大日下王を殺て。其王の嫡妻
ながたのおほいらつめ とりもち き おほきさき これ のち すめらみことかむとこ まし ひるね かね
長田大郎女を取持來て。皇后としたまひき。此より後に。天 皇神牀に 坐て。晝寝ましき。爾その
きさき かたらし みまし おほきさき みうつくしみ ふか なに おもふ
后と語ひて。汝おもほすことありやとのりたまひければ。わが天皇の 敦 の澤ければ。何の思こ
とからむと答 曰。ここに其大后の先の子目弱王。是年七歳になりたまへり。この王。其時。そ
の殿の 下にあそび かねすめらみこと わかきこ もと あそび しろしめさず おほきさきのたまはく
の殿の下に遊ませりき。爾天 皇その少王の殿の下に遊ませることを不 知て。大后詔言。吾ハ
つね なに みまし みこまよわのみこ ひとなり とし あがそのちちみこ しせ しり
恒おもほすことあり。何ぞといへば。汝の子目弱王。成人たらむ時。吾其父王を殺しことを知な
かへし きたなきところあらむか そのとの もと あそび まよわのみこ このみこと きさき
バ。還て邪 心有矣とのりたまひき。ここに其殿の下に遊ませる目弱王。此言を聞とりて。すなは
すめらみこと おほきさき うかかひ かねすめらみこと みくび うちきり
ち天 皇の御寝ませるを竊伺て。その傍なる大刀を取て。乃天 皇の頸を打斬まつりて。
つ ぶら おほみ がいへ にげり このすめらみこといそぢまつつ みはか すがはら ふしみ をか
都夫良意富美之家に逃入ましき。此天 皇五十六。御陵ハ菅原の伏見の岡にあり。ここに
おほはつせのみこ そのかみをくくな うれたみいかり すなはちそのいろせくろひこのみこ ひと
大長谷王子。當時童男にましける。此事をきかして。慷慨忿怒まして。乃其兄黒日子王の許に
いまし ひとすめらみこと とり しかる くるひこのみこ おどろ
到て。人天 皇を取まつれり。いかにせましとまをしたまひき。然にその黒日子王うちも驚かず
おほろか おほはつせのみこ いろせ のり ひとつ すめらみこと ひとつ はらから
て。怠緩におもほせり。ここに大長谷王子その兄を嘗て。一にハ天 皇にまし。一にハ兄弟にま
なぞ いろせ とり きさき おどろき おほろか
すを。何もたのもしげなく。ひとのその兄を殺まつれることを聞つつ。驚もせず怠緩におもほ
いひ すなはち こども とり ひきいで たち うちころし また いろせしろびこのみこ いまし
せると言て。即その衿のくびを握て控出て。刀をぬきて打殺たまひき。亦その兄 白日子王に到
さき ごと つげ みこ くるびこのみこ おほろか
て。前の如ありさま告まをしたまふに。この王もまた黒日子王のごと 緩におもほせりし
すなはち こども とり ひきいで き をはりだ あな ほり たちながら うずみ こし
かバ。即その衿のくびを握て。引率來て。小治田にいたりて。穴を掘て。立隨に埋しかバ。腰
うづむ うづむ ふたつ めはしり みうせ またいさき つぶら おほみ のいへ
を埋ときにいたりて。兩の目走ぬけてぞ死たまひぬる。亦軍をおこして。都夫良意富美之家を
かくみ かねいさき まちたかひ いづ やあし ちる
圍たまひき。爾軍をおこして待 戦て。射出る矢葦のさかりに散がごとくなりき。ここに
おほはつせのみこ ほこ みつゑ そのうち のぞみ のり わがあひいへ をとめ もし いへ
大長谷王子。矛を杖につかして。其内を臨まして詔たまはく。我相言る嬢子ハ。若この家
ありのり つぶら おほみ おほみこと きさき まあて はけ つもの とき
にやと有詔たまひき。ここに都夫良意美この詔命を聞て。みづから參出て。佩る 兵を解て。
やたびをがみ さき とひ むすめからひ め さもらむ またいつころ みやけ そへ
八度揮て。まをしけるハ。先日問たまへる女子訶良比賣ハ。侍。亦五處の屯宅を副てたてま
いハユルイツノコロミヤヤクハイノカヅラキノイツムラノノヒトナリ むざねまぬこ いにしへ いま
つらむ所 謂五村屯宅者今葛城之五村苑人也。しかるにその正身參向ざるゆゑハ。往古より今にいたるま
おみむらじ みこ みや こもる きげ み こ やつこ いへ 二もり おもふ
で。臣連の王の宮に隠ことハ聞ど。王子の臣の家に隠ませることはいまだきかず。ここをもて思
やつこ おほみ ちから たたかふ えかちまつらじ おのれ たのみ やつこいへ いらませ
に。賤奴意富美ハ。力をつくして 戦とも。さらに無可勝。しかれども己を待て。隨家に入坐る
み こ しぬ すて かく また つもの とり かねいりり たたかひ かねいりり たたかひ
王子ハ。いのち死とも棄まつらじ。如此まをして。亦その 兵を取て。還入て 戦き。爾力窮。矢も
つき み こ あ いたておひ や つき いま えたかかはじ い か
盡ぬれば。その王子にまをしけらく。僕ハ傷手悉ぬ。矢も盡ぬ。今ハ不得戦。如何にせむとまをし
み こ み せむすべなし いま われ しせ のり かねたち み こ さししせ
ければ。その王子。しからばに無可爲。今ハ吾を殺よと詔たまひき。故刀もてその王子を刺殺
おの くび きり みうせ のち あふみ きさき やまきみ おやな かねいりり
まつりて。すなはち己が頸を切て死にき。これより後。淡海の佐佐紀の山の君の祖名ハ韓岱まを
あふみ くだわた か やぬ ししおほ たて あし すずきはら きさげ つね からき
さく。淡海の久多綿の蚊屋野に。猪鹿多かり。その立る足ハ。荻原のごとく。指舉たる角ハ。枯樹
いちのべのおしほのみこ あひいざな あふみ いでまし
のごとしとまをしき。このとき市邊之忍齒王を相率ひて。淡海に幸行て。その野にいたりませバ。
こと かりみや やどり かねつとめて ひ いで おしほのみこ みころ
おのおのおも異に假宮をつくりて。宿ましき。爾明旦。いまだ日も出ぬ時。忍齒王。なにの心
み ま のら おほはつせのみこ かりや へ ゆきたた おほはつせのみこ みとも びと のり
もなく。御馬に乗しながら。大長谷王の假宮の傍に到立して。その大長谷王の御伴人に詔
さめまさ はやく よ あけ かりにハ いでまし
たまはく。いまだ寤坐ぬにこそ。早まをすべし。夜ハすでに曙ぬ。獵庭に 幸べしとのり
すなはちみま すすめ いでまし おほはつせのみこ みもと さもらふひとども もの み こ
たまひて。乃馬を進て出行ぬ。ここに大長谷王の御所に侍人等。うたて物いふ王子な
みころ み み かため かねいりり よろひ き ゆみや とりはかし
れば。應慎したまへ。御身をも堅たまふべしとまをしき。即衣のうちに甲を服まし。弓矢を取佩
みま のら いでまし たちまち うま ゆき や おしほのみこ い
て。馬に乗して出行て。忽に馬より往ならばして。矢をぬきて。その忍齒王を射おとし

て。乃亦その身を切て馬楯に入て。土とひとしく埋き。ここに市邊往の王子等。
意富祁王袁祁王。この亂を聞いて。逃去ましき。故山代の苜羽井にいたりまして御糧食
めすときに。面黥る老人來て。その糧を棄き。爾その二王。糧ハ惜まぬを。汝ハ誰人
ぞとのりたまへば。我ハ山代の猪甘なりと答曰。故玖須婆の河を逃わたりて。針間國にい
たりまし。その國人名ハ志自牟之家に入まして。身を隠て。馬甘牛甘にぞ役えいましけ
る。

二十一 雄略天皇

大長谷若建命。長谷朝倉宮に坐て天下治めしき。この天皇。大日下王の妹。若日下部王
に娶ましき。无子また都夫良意富美が女。韓比賣を娶て生ませる御子。白髮命。つぎ
に妹若帶比賣命。故白髮太子の御名代として。白髮部を定たまひ。また長谷部の舍人を定
たまひ。また河瀬の舍人を定たまひき。この時に吳人參渡來つ。その吳人を吳原に置た
まひき。かれ其地を吳原と謂なり。初大后日下に上けるとき。日下の直越の道より。河内
に幸行き。爾山の上に登まして。國內望せれば。堅魚を上て舍を作る家あり。天皇その家
を問しめたまはく。其堅魚を上て作る舍ハ。誰家ぞととはしめたまひしかば。志幾の大縣主
が家なりとまをしき。ここに天皇詔たまへるハ。奴や。己が家を。天皇の御舎に似て造
れりとのりたまひて。即人を遣して。其家を焼しめたまふ時。その大縣主懼畏て。稽首
まをさく。奴にあれば。奴隨さとらずて。過作れり。甚畏とまをしき。故能美の御幣物
をたてまつる。白き犬に布を繫て。鈴を著て。己が族名ハ腰佩と謂人に犬の繩をとらしめて
献上。故その火著ることを止しめたまひき。即その若日下部の王の許に幸行て。その犬
を賜いれて。詔しめたまはく。この物ハ。今日道に得つる奇物なり。故つまどひの物
と云て。賜入き。ここに若日下部王。天皇に奏しめたまはく。日に背て幸行事。甚恐。
故己直に參上て仕奉とまをさしめたまひき。ここをもて宮に還上坐ときに。其山の坂
の上に行立して。歌曰。くさかべの。こちのやまと。たたみこも。へぐりのやまの。こ
ちごちの。やまのかひに。たちざかゆる。はびろくまかし。もとにハ。いくみだけおひ。
すゑへにハ。たしみだけおひ。いくみだけ。いくみハねず。たしみだけ。たしにハぬねず。
のちもくみねむ。そのおもひづま。あはれ。即此歌を持しめて。返使き。亦あるとき
天皇遊しつ。美和河に到ませる時に。河の邊に衣あらふ童女あり。其容姿いと麗き。
天皇その童女に汝ハ誰子ぞと問しければ。己が名ハ引田部の赤猪子と謂とまをしき。故詔
しめたまへらくハ。汝不嫁てあれ。今喚てむとのらしめたまひて。宮に還坐き。故その
赤猪子。天皇の命を仰待て。既に八十歳を経たりき。ここに赤猪子おもひけるハ。命を
あふぎまちつる間に。己に多の年を経て。姿體瘦萎てあれば。更に恃なし。しかれ
ども待つる情を顯しまをさずてハ。悞て不忍とおもひて。百取の机代物を持しめて。參出
て獻き。しかるに天皇先に命りし事をバ既忘らして。その赤猪子に問曰。汝ハ誰や
し老女ぞ。何由ぞ參來つるととはしければ。爾赤猪子答曰。其年の其月に。天皇の命を
かがふりて。今日至大命を仰待て。八十歳を経にたり。今ハ容姿すでに着て。更に恃な
し。然ハあれども己が志を顯しまをさむとしてこそ。參出つれとまをしき。ここに天皇大
驚まして。吾ハ既先の事をわすれたり。然るに汝守志に命をまちて。徒に年のさかり
を過しこと。いと愛悲とのりたまひて。婚まほしく心裏ども。その極老ぬるに憚たま
ひて。得婚ずて。御歌をたまひき。其歌曰。みもろの。いつかしがもと。かしがもと。ゆ
ゆしきかも。かしはらをとめ。又歌曰。ひけたの。わかかるすばら。わかへに。ぬねて

ましもの。おいにけるかも。爾赤猪子が泣涙に。其服る丹摺の袖とほりて濕ぬ。その大御歌
 に答まつれる歌曰。みもろに。つくやたまかき。つきあまし。たにかもよらむ。かみの
 みやひと。又歌曰。くさかえの。いりえのはちす。はなばちす。みのさかりびと。ともし
 ろきかも。爾其老女に禄多に給て。返し遣たまひき。かれこの四歌ハ。志都歌なり。
 天皇吉野宮に幸ませるとき。吉野川のほとりに。童女のあへる。其形容よかりき。故こ
 の童女をめして。宮にかへり坐き。後に更にまた吉野に幸行るときに。其童女の遇りし所に
 とどまりまして。其處に大御呉床を立て。その御呉床に坐て。御琴をひかして。其嬢子
 に舞せしめたまひき。かれ其嬢子よく舞るによりて。御歌よみしたまへる。其歌曰。あぐ
 らゐの。かみのみてもち。ひくことに。まひするをみな。とこよにもかも。即阿岐豆野
 に幸まして。御獵せすときに。天皇御呉床に坐けるに。蛭御腕を咋て。飛いにき。ここに
 御歌よみしたまへる。其歌曰。みえしぬの。をむろがたけに。ししふすと。たれぞおほま
 へに。まをす。やすみしし。わがおほきみの。しつまつと。あぐらにいまし。しろたへの。
 そてきそなふ。たこむらに。あむかきつき。そのあむを。あきづはやくひ。かくのごと
 なにおはむと。そらみつ。やまとのくにを。あきづしまとふ。故其時よりぞ。其野を阿岐豆野
 とハ謂ける。またあるとき。天皇葛城の山の上に登。幸き。ここに大猪出たりき。即
 天皇鳴鏑をもちて。其猪を射たまへる時に。其猪いかりて。宇多岐依來。故天皇その宇多岐
 を畏て。榛の上へのぼりましき。爾歌よみし曰。やすみし。わがおほきみの。あそば
 し。ししの。やみしの。うたきかしこみ。わがにげ。のぼりし。ありをの。はりのきのえ
 だ。又一時天皇葛城山に登。幸る時。百官の人等。ことごと紅紐つける青摺の衣をたま
 はりて服たりき。其ときに其向の山の尾より。山の上へのぼる人あり。すでに天皇の函箒
 にひとしく。其装束の状。及人衆も。相似て頭れず。ここに天皇望て問しめたまはく。
 茲倭國に。吾を除て亦王ハ無を。今誰人ぞ如此て行とハしめたまひしかバ。答まをせ
 る状も天皇の命のごとくなりき。於是天皇大いからして。矢刺たまひ。百官の人等
 も。悉に矢刺ければ。其人等もみな矢刺り。故天皇また問しめたまはく。しからバ其名
 を告さね。各も各名を告て矢はなたむとのりたまひき。於是答まをさく。吾先とハえ
 たらバ吾先名告せむ。吾ハ。惡事も一言。善事も一言。言離の神。葛城の一言主之大神な
 りとまをしたまひき。ここに天皇惶てまをしたまはく。恐我大神。宇都志意美まさむ
 とハ覺ざりきと白したまひて。大御刀また弓矢をはじめて。百官の人等の服る衣を脱し
 めて。揮てたてまつりき。爾その一言主之大神手打て其ささげ物を受たまひき。故天皇
 の還幸とき。その大神手をくだりまして。長谷山の口におくりまつりき。故この一言
 主之大神ハ。その時にぞ顯れませる。また天皇。丸邇の佐都紀臣が女袁杼比賣を婚に。
 春日に幸ませるとき媛女の道にあへる。幸行を見て。岡邊に逃かくりき。かれ御歌よみし
 たまへる。その御歌。をとめの。いかくるをか。かなすきも。いほちもがも。すきばぬ
 るもの。故其岡を。金鉏の岡とぞ號ける。又天皇長谷の百枝槻のもとに坐まして。豊樂
 きこしめすときに。伊勢國の三重の姦。大御盞をささげて獻き。ここにその百枝槻の葉おち
 て。大御盞に浮りき。その姦落葉の盞にうかべるをしらずて。猶大御酒たてまつりけるに。
 天皇其みさかづきに浮る葉を看そなはして。その姦を打伏。刀を其頸に刺あて。斬たまは
 むとするときに。其姦天皇にまをしけらく。吾身を莫殺たまひそ。白べき事ありとま
 をして。即歌曰。まきむくの。ひしろのみやハ。あさひの。ひでるみや。ゆふひの。
 ひがけるみや。たけのねの。ねだるみや。このねの。ねばふみや。やほによし。いきづき

のみや。まきさく。ひのみかど。にひなへやに。おひだてる。ももだる。つきがえハ。ほつえハ。あめをおへり。なかつえハ。あづまをおへり。しづえハ。ひなをおへり。ほつえの。えのうらばハ。なかつえに。おちふらばへ。なかつえの。えのうらばハ。しもつえに。おちふらばへ。しづえの。えのうらばハ。ありぎぬの。みへのこが。ささがぜる。みづたまうきに。うきしあぶら。おちなづさひ。みなこをろ。こをろに。こしも。あやにかしこし。たかひかる。ひのみこ。ことの。かたりごとも。こをバ。故此歌を 獻 しかバ。其罪 赦 にかき。ここに大后歌はしける其歌曰。やまとの。このたけちに。こだかる。いちのつかさ。にひなへやに。おひだてる。はびろ。ゆつまつばき。そがはの。ひろりいまし。そのはなの。てりいます。たかひかる。ひのみこに。とよみき。たてまつらせ。ことの。かたりごとも。こをバ。即 天 皇 歌 曰。ももしきの。おほみやひとハ。うづらとり。ひれとりかけて。まなばしら。をゆきあへ。にはすずめ。うずすまりみて。けふもかも。さかみづくらし。たかひかる。ひのみやひと。ことの。かたりごとも。こをバ。此三歌ハ。天語歌なり。故この豊 樂に。その三重嫁をほめて。祿多にたまひき。この豊 樂の日。また春日の袁杼比賣が。大御酒たてまつるときに。天 皇の歌 曰。みなそそく。おみのをとめ。ほだりとらすも。ほだりと。かたくとらせ。したがたく。やがたくとらせ。ほだりとらすこ。此ハ宇岐歌なり。爾に袁杼比賣歌を 獻れる。其歌曰。やすみし。わがおほきみの。あさとにハ。いよりだたし。ゆふとにハ。いよりだたす。わきづきが。したの。いたにもが。あせを。此ハ志都歌也。天 皇。御年百二十四。御陵ハ河内の多治比の高鸛にあり。

二十二 清寧天皇

しらかのおほやまとねこのみこと いはれのみかくりのみや ましへ あめのしたしろし すめらみこと おほきさき み こ
白髪大倭根子命。伊波禮之甕栗宮に 坐て。天下治めしき。この天 皇。皇后ましまさず。御子
もましまさざりき。故御名代として。白髪部を定たまひき。かれ天 皇 崩 まして後。天下
治すべき王ましまさず。ここに日繼しろしめさむ王を問に。市邊忍齒別王の妹。忍海郎女。
またの名ハ。飯豊王。葛城の忍海の高木の角刺宮にましましき。ここに山部連小楯。針間國
の任宰にまかれる時に。其國の人 民名ハ志自牟が新室に到りて。樂す。ここに盛にうた
げて。なかばなるとき。次第のままに皆舞ぬ。かれ火焼少子ふたり。籠の傍に居たる。そ
の少子等にも舞しむるに。其ひとりの少子。汝兄先舞たまへと曰バ。其兄も。汝弟先舞た
まへと曰。かく相讓るときに。その會る人ども。その相讓さまを咲き。爾つひに兄まづ舞
をはりて。つぎに弟舞とすときに。詠ごと爲曰。物部の。我夫子が。取佩る。大刀の手上
に。丹畫著。その緒にハ。赤幡を載。あかはた立て。見ゆれば五十隱。山の三尾の。竹
を。本詞岐苜。末押なびかす魚簀。八絃の琴をしらべたるごと。天下治たまひし。
伊邪本和氣天 皇の御子。市邊之押齒王の。奴爾末とのりたまへバ。すなはち小楯連聞お
どろきて。床より隨まるびて。其室なる人どもを追いだして。其二柱の王子を。左 右の膝
の上に。坐まつりて。泣 悲て。人民どもを集て。假宮をつくりて。その假宮に坐まつり置
て。上驛使たてまつりき。ここに其姨飯豊王。聞よろこばして。宮に上らしめたまひき。
故天下治めさむとせしほど。平羣臣の祖。名ハ志毘臣。歌垣に立て。其袁祁命の婚むと
する美人の手をとれり。その嬢子ハ。菟田首等が女。名ハ大魚といへり。爾袁祁命も歌垣
に立しき。ここに志毘臣歌 曰。おほみやのをとつはたで。すみかたぶけり。如此うたひ
て。其歌の末を乞とすに。袁祁命歌 曰。おほおくみ。をぢなみこそ。すみかたぶけれ。
爾志毘臣また歌 曰。おほきみの。こころをゆらみ。おみのこの。やへのしばかき。いり
たたずあり。於是王子また歌 曰。しほせの。なをりをみれば。あそびくる。しびがはた

でに。つまたてりみゆ。爾志毘臣いよよ忿て歌曰。おほきみの。みこのしバかき。やふ
じまり。しまりもとほし。きれむしバかき。やけむしバかき。爾に王子また歌曰。おふ
をよし。しびつくあまよ。しがあれば。うらこほしけむ。しびつくしび。如此歌ひて。鬪明
て。各退ましぬ。明旦時。意富祁命袁祁命二柱はかりたまはく。すべて朝廷の人等ハ。旦
にハ朝廷に參、晝ハ志毘が門に集ふ。亦今ハ志毘かならず寝たらむ。其門に人も無む。故今
ならずハ。謀難けむとはかりて。即軍をおこして。志毘臣が家を圍て。殺たまひき。
ここに二柱の王子等。各に天下讓たまひて。意富祁命その弟袁祁命に讓たまはく。針間
の志自牟が家に住りし時に。汝命名を顯したまはざらましかば。更に天下しらすむ君と
ハならざらましを。是既汝命の功にぞありける。故吾兄にハあれども。猶汝命先天下
を治めしてよといひて。堅く讓たまひき。故得辭たまはずて。袁祁命ぞ。先天下しろし
めしける。御陵河内坂門原也。

二十三 顯宗天皇

をけのいハすわけのみこと ちかつあすかのみや ましへ やとせあめのしたしるし すめらみこと いハきのみこ みむすめなにはのみこ
袁祁之石巢別命。近飛鳥宮に坐て。八歳天下治めしき。この天皇。石木王の女難波王
に娶ましき。子ハましまさざりき。この天皇。その父王市邊王の御骨を求たまふときに。
淡海國なる賤き老嫗參出てまをしつらく。王子の御骨を埋たりし所ハ。もはら吾よく知り。また其
御齒もて知べしとまをしき御齒者如三枝押齒坐也。爾民を起て。土をほりて。その御骨を求て。
すなはち其御骨を獲たまひて。その蚊野の東の山に。御陵をつくりて葬まつりて。韓俗
が子等に。其御陵を守りしめたまひき。然後持上其御骨也。故還り上りまして。其老嫗をめ
して。その地をわすれず見置て知りしことをほめて。置目老嫗といふ名をたまひき。仍て宮の内に
召いれて。敦く廣くめぐみたまひき。故その老嫗の住屋をバ。宮の邊ちかく作て。毎日にかならず
召き。故大殿の戸に鐸を懸て。その老嫗を召むとする時ハ。かならず其鐸を引鳴したまひき。爾
御歌よみしたまへる。其歌曰。あさぢはら。をだにをすぎて。ももづたふ。ぬてゆらくも。おきめく
らしも。於是置目老嫗。僕甚耆老にたれば。本國に退ま欲とまをしき。かれ白る隨退たまふ時
に。天皇見送して。歌曰。おきめもや。あふみのおきめ。あすよりハ。みやまがくりて。みえず
かもあらむ。初天皇難に逢て。逃ましときに。其糧を奪し猪甘の老人を求たまひき。こ
こに求得たるを。喚上て。飛鳥河の河原に斬て。皆その族どもの膝の筋を斷たまひき。
ここをもて今にいたるまで。其子孫倭に上る日。かならずおのづから跛也。故その老の
ありかよくみしめき。そのしめず すめらみこと そのちち みこ ころし おほはつせのすめらみこと
在所を能見志米岐。かれ其地を志米須といふ。天皇。其父の王を殺たまひし大長谷天皇を
深く怨まつりて。其靈に報むとおもほしき。故その大長谷天皇の御陵を毀むと欲て。人
をつかはす時に。その伊呂兄意富祁命のまをしたたまはく。この御陵を破壊にハ。他人を遣
べからず。專僕みづから行て。天皇の御心の如やぶりにて參出むとまをしたたまひき。爾天皇。
しからバ命のまにまに幸行と詔たまひき。ここをもて意富祁命自から下り幸まして。其
御陵の傍を少堀て。還り上らして。既に堀壞ぬとまをせしたまひき。ここに天皇。
はやく還上りませることを異まして。如何さまに破壊たまひしぞと詔たまへバ。其陵
の傍の土を少堀つと答白たまひき。天皇のりたまはく。父王の仇を報むとおもふなれ
バ。かならず其陵を悉にやぶりにてむを。何少堀たまひしとぞのりたまへバ。答曰。然爲
つるゆゑハ。父王の怨を。其靈に報むとおもほすハ。誠に理なり。しかれども其
おほはつせのすめらみこと ちちみこ あた かへり あがをち またあめのしたしるし すめらみこと
大長谷天皇ハ。父の怨にハあれども。還てハ我從父にまし。亦天下治めしし天皇に
ますを。今ひとへに父の仇といふころざしをのみ取て。天下治めしし天皇の陵をこ
とごとく破なバ。後のよの人かならず誹謗まつりてむ。唯父王の仇ハ。報ずハあるべか

らず。故其御陵の邊を少堀つ。既是恥みせまつりてあれば。後の世に示にも足なむ。如此
まをしたまひつれば。天皇。これもまた大道理なり。命のごとくて可とぞ答詔ける。故
天皇崩まして。すなはち意富祁命天津日繼しろしめしき。この天皇。御年三十八。
八歳天下治めしき。御陵ハ片岡の石坏の岡の上にあり。

二十四 仁賢天皇

意富祁命。石上の廣高の宮に坐て。天下治めしき。この天皇。大長谷若建天皇之
御子春日大郎女に娶まして。生ませる御子。高木郎女。つぎに財郎女。つぎに久須毘郎女。
つぎに。つぎに小長谷若雀命。つぎに眞若王。また丸邇日爪臣の女糠若子郎女をめて。生
ませる御子。春日山田郎女。この天皇の御子たち。并て七柱ます。この中に小長谷若雀命
ハ。天下治めしき。御陵河内埴生坂本也

二十五 武烈天皇

小長谷若雀命。長谷の列木宮に坐て。八歳天下治めしき。この天皇太子ましまさず。
故御子代として。小長谷部を定たまひき。御陵ハ片岡の石坏の岡にあり。この天皇既に
崩まして。日續しろしめすべき王ましまさず。故品太天皇の五世之孫。袁本杼命を。
近淡海國より上り坐しめて。手白髪命に合まつりて。天下を授奉き。

二十六 繼體天皇

袁本杼命。伊波禮の玉穗宮に坐て天下治めしき。この天皇。三尾君らが祖名ハ若比賣を
めて生ませる御子。大郎女。つぎに出雲郎女。また尾張連らが祖凡。連が妹目子郎女を
めて生ませる御子。廣國押建金日命。つぎに建小廣國押楯命。また意富祁天皇の御子
手白髪命は大后也に娶まして生ませる御子。天國押波流岐廣庭命。また息長眞手王の女
麻組郎女をめて生ませる御子。佐佐宜郎女。また坂田大股王の女黒比賣をめて生ま
せる御子。神前郎女。つぎに茨田郎女。つぎに馬來田郎女。又娶茨田連。小望之女關比賣
生御子。茨田大郎女。つぎに白坂活日子郎女。つぎに小野郎女。またの名ハ長目比賣。ま
た三尾君加多夫が妹。倭比賣をめて生ませる御子。大郎女。つぎに丸高王。つぎに耳王。
つぎに赤比賣郎女。また阿倍の波延比賣をめて生ませる御子。若屋郎女。つぎに
都夫良郎女。つぎに阿豆王。この天皇の御子等。あはせて十九王男七女十二。この
中に天國押波流岐廣庭命ハ。天下しろしめしき。つぎに廣國押建金日命も天下しろしめ
しき。つぎに建小廣國押楯命も天下しろしめしき。つぎに佐佐宜王ハ。伊勢神宮を拜ま
つりたまひき。この御世に。竺紫君石井。天皇之命にしたがはずして。无禮こと多かりき。
故物部の荒甲之大連。大伴之金村連二人をつかはして。石井を殺しめたまひき。この天皇。
御年四十三。御陵ハ三嶋の藍にあり。

二十七 安閑天皇

廣國押建金日命。勾の金箸宮に坐て天下治めしき。この天皇御子ましまざりき。御陵
ハ河内の古市の高屋村にあり。

二十八 宣化天皇

建小廣國押楯命。檜堀の廬野宮に坐て天下治めしき。この天皇。意富祁天皇の御子。橘
の中比賣命に娶まして。生ませる御子。石比賣命。つぎに小石比賣命。つぎに倉之若江王。
また川内の若子比賣をめて。生ませる御子。火穗王。つぎに惠波王。この天皇の御子等。
あはせて五王男三女二。故火穗王ハ志比陀君之祖。惠波王ハ韋那君。多治比君之祖也。御陵身狭
桃花鳥坂之上也。

二十九 欽明天皇

あめのくにおしはるきひろにハのすめらみこと しきしま おほみや ましへ umeのしたしろし すめらみこと ひのくすめらみこと
天國押波流岐廣庭天皇。師木嶋の大宮に坐て。天下治めしき。この天皇。檜垣天皇の
御子石比賣命に娶まして。生ませる御子。八田王。つぎに沼名倉太王敷命。つぎに笠縫王
三 またその弟小石比賣命に娶まして。生ませる御子。上王また春日の日爪臣の女
柱ぬかこのいらつめ うみ み こ かすが やまだのいらつめ まるこのみこ そが くらのみこ
糠子郎女をめて。生ませる御子。春日の山田郎女。つぎに麻呂古王。つぎに宗賀の倉王
三 また宗賀の稲目宿禰大臣の女岐多斯比賣をめて。生ませる御子。橘之豊日命。つぎ
柱 そが いなめのすくねのおほきみ むすめきたしひめ うみ み こ たちばな のとよひのみこと
に妹石桐王。つぎに足取王。つぎに豊御氣炊屋比賣命。次にまた麻呂古王。つぎに山代王。
つぎに妹大伴王。つぎに櫻井之玄王。つぎに麻奴王。つぎに橘本之若子王。つぎに泥杼王
十三 また岐多志比賣命の姨小兄比賣をめて。生ませる御子。馬木王。つぎに葛城王。つぎ
柱 はしびとのあなほべのみこ さきくさべのあなほべのみこ みな すめい り ど はつせべのわかさぎのみこと
に間人穴太郎王。つぎに三枝部穴太郎王。またの名ハ須賣伊呂杼。つぎに長谷部若雀命
五 すべてこの天皇の御子等。あはせて廿五王。この中に沼名倉太王敷命ハ。天下治め
柱 たちばな のとよひのみこと あめのしたしろし とよみけかしきやひめのみこと あめのしたしろし
しき。つぎに橘之豊日命も。天下治めし。つぎに豊御氣炊屋比賣命も。天下治めしき。
つぎに長谷部之若雀命も。天下治めしき。あはせて四王なも。天下治めしける。御陵
セツトノクマニサカサヒアリ
大和檜隈坂合也。

三十 敏達天皇

ぬなくらふとたましきのみこと をさだのみや ましへ とをまりよせあめのした すめらみこと ままいも
沼名倉太王敷命。他田宮に坐て。十四歳天下しろしめしき。この天皇。庶妹
とよみけかしきやひめのみこと みあひ うみ み こ しずかひのみこ みな かひだこのみこ たげだのみこ
豊御氣炊屋比賣命に娶まして。生ませる御子。静貝王。またの名ハ貝鮎王。つぎに竹田王。
またの名ハ小貝王。つぎに小治田王。つぎに葛城王。つぎに宇毛理王。つぎに小張王。つ
ぎに多米王。つぎに櫻井玄王また伊勢大鹿首の女小熊子郎女をめて。生ませる御子。
ふとひめのみこと たからのみこ みな ぬかでひめのみこ おきながのまでのみこ みむすめひろひめのみこと
布斗比賣命。つぎに寶王。またの名ハ糠代比賣王また息長眞手王の女比呂比賣命に
みあひ うみ み こ おさかのひ こひのみこのみこと みな まるこのみこ さかのぼりのみこ
娶まして。生ませる御子。忍坂日子人太子。またの名ハ麻呂古王。つぎに坂騰王。つ
ぎに宇遲王また春日中若子が女老女子郎女をめて。生ませる御子。難波王。つぎに
くはだのみこ かすがのみこ おほまたのみこ すめらみこと み こ たち とをまりなはしら なか
桑田王。つぎに春日王。つぎに大股王この天皇御子等。あはせて十七王ませる中に。
日子人太子。庶妹田村王またの名ハ糠代比賣王に娶まして。生ませる御子。岡本宮に
あめのしたしろし すめらみこと なかつみこ たらのみこ あやのみこ いもおほまたのみこ みあひ
ましまして。天下治めし天皇。つぎに中津王。つぎに多良王また漢王の妹大股王に娶
うみ み こ やましろのみこ かさぬひのみこ なはしら みはか かふち しなが
まして。生ませる御子。山代王。つぎに笠縫王あはせて七柱。御陵ハ川内の科長にあり。

三十一 用明天皇

たちばな のとよひのみこと いけべのみや ましへ みとせあめのしたしろし すめらみこと いなめのすくねのおほきみ むすめ
橘之豊日命。池邊宮に坐て。三歳天下治めしき。この天皇。稲目宿禰大臣の女。
おほぎたしひめ うみ み こ ためのみこ ままいもはしびとのあなほべのみこ みあひ うみ
意富藝多志比賣をめて。生ませる御子。多米王また庶妹間人穴太郎王に娶まして。生
み こ うへのみや うまやどのとよみのみこと くめのみこ るくりのみこ まむたのみこ たぎま
ませる御子。上宮の麿戸豊聰耳命。つぎに久米王。つぎに植栗王。つぎに茨田王また當麻の
くらびとひろ むすめ いひめのみこ うみ み こ たぎまのみこ いもすがしろこのいらつめ
倉首比呂が女。飯女子をめて。生ませる御子。當麻王。つぎに妹須賀志呂古郎女。この
すめらみこと みはか いはれのいけのべ のち しなが なか みさぎき うつし
天皇。御陵ハ石寸掖上にありしを。後に科長の中の陵に遷まつりき。

三十二 崇峻天皇

はつせべのわかさぎのすめらみこと くらはし しゆきのみやましへ よとせあめのしたしろし みはか くらはし をか へ
長谷部若雀天皇。倉椅の柴垣宮坐て。四歳天下治めしき。御陵ハ倉椅の岡の上にある。

三十三 推古天皇

とよみけかしきやひめのみこと をはりだのみや ましへ みとせまじりなとせあめのしたしろし みはか おほぬ をか へ
豊御氣炊屋比賣命。小治田宮に坐て。三十七歳天下治めしき。御陵ハ大野の岡の上にあ
のち しなが おほみさぎき うつし
りしを。後に科長の大陵に遷まつりき。

ふることぶみしもつまきおハリ
古事記下巻終

明治七年一月發行 東京 中西忠誠
甲斐 内藤傳右衛門

伊勢國松坂白粉町	中西 嘉助
遠江國濱松連尺町	伊勢屋權平
上野國高崎田町三丁目	文心堂源作
下野國栃木萬町三丁目	釜屋 喜平
磐代國若松中一之町	龍田屋半藏
西京柳馬場御池通南	北村四郎兵衛
東京外神田末廣町	英 文藏
同 馬喰町二丁目	森屋 治兵衛
同 芝大神宮前	和泉屋吉兵衛